

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12583

研究課題名（和文）発達障害のある子どもと家族の就学期の移行を支える看護ケアモデルの構築

研究課題名（英文）Developing a nursing care model for supporting the transition to school among children with developmental disorders and their families

研究代表者

池添 志乃（IKEZOE, SHINO）

高知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：20347652

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、発達障害のある子どもと家族の就学期の移行を支える看護ケアモデルを構築することである。分析の結果、発達障害のある子どもと家族の就学期の移行を支える看護ケアとして、子どもと家族の強み、意思決定を尊重すること、子どものセルフケアの移行を支えること、移行過程の中で子どもの新たな役割の修得、ソーシャルスキの獲得を支えること、その子らしく生きることができる道筋を見通しながら生き抜く力を支えること、家族の形成を支えること、学校から社会への移行を見据えたその子の進路保障を行っていく支援体制の整備などが見いだされた。多職種協働のもと途切れのない多様な支援を行っていくことの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的な特色は、発達障害のある子どもと家族の就学期の移行において、ライフステージに添った切れ目のない支援の継続とともに、家庭-学校-地域（保健医療福祉）連携の推進の重要性は示されているが、それらを統合した看護ケアについてはまだ十分に研究がなされていない点にある。さらに、本研究結果から導かれる看護ケアモデル、ケアガイドラインは、養護教諭や他の教職員、地域の医療・福祉等の専門職者と研究者との協働のプロセスの中で開発される理論知、実践知を統合したものである。実践知と理論知を統合し、体系化することで臨床に即したエビデンスのある知として発展させることができ、学術的特色を有するものになると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a nursing care model for supporting the transition to school among children with developmental disorders and their families. The analysis resulted in the discovery of nursing care practices for supporting the transition to school in this population, including respecting the strengths and wishes of the child and their family, supporting the child's transition to self-care, supporting the child's acquisition of a new role and social skills during the transition process, envisioning a path that will allow the child to continue to be themselves while supporting their capacity to see things through, supporting the family structure, and preparing support systems to secure the child's future with particular attention to the transition from school to society. These results suggest the need to provide diverse and seamless support with a foundation of multidisciplinary collaboration.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：移行 看護ケアモデル 就学期 発達障害 子どもと家族

1. 研究開始当初の背景

「健やか親子 21 (第 2 次)」において、ライフステージをとおして発達障害をはじめとする育てにくさを感じる親に寄り添う支援の充実を図ることが重点課題の一つとして取り上げられている (2015)。発達障害者支援法の改正 (2016) においても、個人としての尊厳を重視した日常生活、社会生活に向けた支援、切れ目のない支援体制の構築、人格と個性を尊重した共生社会の実現といった理念が示された (2016)。また、障害者基本法で「合理的配慮」の規定 (2016) により、一人ひとりの障害の状態や教育的ニーズに応じて子どもや家族の意思決定を尊重した支援が求められている。特に就学は、危機的場面に陥りやすい生活様式間の移行と捉えられており、発達障害のある子どもと家族は、就学により人間関係や生活全体が大きく変わり、適応には大きなストレスがかかる。小学校就学には、これまで子どもや保護者が周りの人々との関係のもとで作り上げてきた生活が、生活時間の変化や支援者などサポートネットワークの変化に伴い、一度崩れ、新たな生活を再構築していくことが求められる (Chick&Meleis;1986)。

以上のことから、移行期において発達障害のある子どもと家族の意思を最大限尊重し、家庭-学校-地域の専門職者間で合意形成を行いながら支援していくことが重要である。また今後さらに医療、看護、教育、福祉等の複眼的、重層的視点から発達障害のある子どもと家族の移行を支えるケアのあり方を探求していくことが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、発達障害のある子どもと家族の就学期の移行を支える看護ケアモデルを構築することである。

3. 研究の方法

発達障害のある子どもとともに生活する家族を対象に就学期の移行における体験 (病気の捉え、ニーズ、情緒的反応、生活への影響等) や移行の特性、変化について面接調査を行った。また発達障害のある子どもの支援を行った経験のある看護者を対象に、発達障害のある子どもと家族への看護ケア行動 (援助関係の形成方法、アセスメント、介入の意図、介入方法)、求められるケアについて面接調査を実施した。データ分析は質的分析を行った。倫理的配慮: 研究協力者に対して、研究参加への自由意思の尊重、研究協力の撤回の自由、プライバシーの保護、心身の負担、不利益や危険性への配慮、対象が受ける利益や看護上の貢献、資料・データ等の適切な方法による保管、研究結果の公表の仕方について説明し、同意を得た。本研究は、高知県立大学研究倫理委員会の承認を得てから実施した。

4. 研究成果

データ分析の結果、発達障害のある子どもと家族の就学期の移行を支える看護ケアモデルは、〔移行期のニーズを捉え病気体験を理解する〕〔社会とのつながりを支える〕〔その子らしく、家族らしく生きることを支える〕の 3 つの局面から構成される。

1)〔移行期のニーズを捉え病気体験を理解する〕

看護者として、親と これまでの子育ての体験を振り返る機会をもつ（ち、就学や就職などの移行における困りごとを子どもと家族の語りから引き出す）しながら、家族の困りごとや将来への不安を理解する。発達障害のある子どもの子育てへの気持ちのゆらぎ（を理解する）や 発達障害による学校生活や友人関係への影響を理解（する）し、学校における支援体制の強化につなげるようにする。

2)〔社会とのつながりを支える〕

親は学校や地域社会で、いじめられずに安全に、安心して過ごせるようになってほしいとのニーズを抱いている。看護者として、子どもの特性の理解を促す策を家族とともに考える、クラスメイトとの関係の調整を図る ようにする。どうしたら学校生活がうまくいくのか答えの見えない困難な状況のなかで子どもと家族への時期を逃さない専門的な助言を行う、同じ体験をもつファミリーサポートとの関わりを促す、家族と学校とのつながりを絶やさない ようにする。また 助けを得るための自己開示の必要性を伝える、必要に応じて援助を求めることができるようオープンになることを支える ようにする。

3)〔その子らしく、家族らしく生きることを支える〕

(1)【子どもと家族の強みを理解し強化する】

看護者として、常に 子どもと家族の味方になる、障害がその子の武器になるようその子のもつ才能を認めて伸ばす ように関わる。学校生活においては、その子の得意分野で皆から一目置かれるように仕向け（る）、子ども自身も 特性を自分の個性として捉えることができる ように関わ（る）り、特技を自らの自信として友人とつながることができるよう支える。

(2)【意思決定を尊重する】

看護者として、子どもが自己決定できる場をつく（る）り、主体的に日常生活に取り組んでいくことができるように支える。周りへの病気の開示について子どもと親と話す場をもつ ようにして、周囲とのかかわりについても子どもと親の意思を尊重した関りを行う。

(3)【子どものセルフケアの移行を支える】

看護者は、子どものセルフケアをアセスメントし 子どもに任せるセルフケア行動の範囲を見極め（る）、自信をもってできることを増やす ように関わる。移行時期をとらえながら 家族の支えから自立しようとする子どもの成長を支える。また 子ども本人のもつ力を信じ、見守りながら、必要なときに軌道修正することを支援する。

(4)【移行過程の中で子どもの新たな役割の修得を促進する】

家族は、他の子どもと同じ体験をしてほしい、同じようにかかわってほしいなど子どもの学校生活でその子らしく過ごせることへのニーズをもっている。看護者として、子どもの発達段階を踏まえながら、他の子どもと同じ体験の場をつくる。進級や進学の際 移行過程に必要な役割の取得を支える ようにする。

(5)【ソーシャルスキの獲得を支える】

子どもの特性を把握したうえで、友だちとのかかわり方を具体的に教え（る）たり、自分

の考えを周りに伝えることを支える など、 コミュニケーション力を育む 、 子どもの対人関係力を育む ようにする。

(6)【その子らしく生きることができる道筋を見通しながら生き抜く力を支える】

親は、子どもにとって最善の進学先、就職先を選択したいなどの願いを抱いている。看護者として、子どもと親とともに 子どもの特性を活かした将来の方向性を描く 、 子どもの自ら将来の道を選択していくことができるよう支える (る) 、 移行のプロセスの中での適応を支える ようにする。

(7)【家族の形成を支える】

親は、発達障害のことを開示することへの戸惑いや子育ての困難感を抱いたり、周りからのスティグマや家族内での共通理解がもてないことによる苦悩を経験したりする。看護者として、移行期の発達の危機を捉え、 子育ての苦勞を共感 (する) しながら、 家族として子育てに向き合うことができるよう家族関係の調整 を図る。 家族との合意形成を図 (る) りながら、 家族員個々と家族全体の思いを捉えながら支援の方向性を見極め支援する 。 きょうだい児のかかわりの時間をつくる よう、親子関係の形成を支える。同時に 育児に関する相談 を行い、 育児への肯定的フィードバックを行 (う) いながら、母親役割、父親役割といった 親役割の獲得の支える

(8)【学校から社会への移行を見据えた進路保障を含む支援体制の整備】

親は、子どもにとって最善の進学先、就職先を選択したいなどの願いを抱いている。看護者として、子どもと親とともに 子どもの特性を活かした将来の方向性を描く 、 子どもの自ら将来の道を選択していくことができるよう支える ようにする。移行に伴う発達の危機、状況の危機を予測的に捉え、子どもの進路保障がなされるよう事前に関係機関につなぐ ようにする。また子どもと家族の抱える困難に応じた専門機関との連携を図り

トランジションは、「ひとつのかなり安定した状態から次の安定した状態に移る間の期間のこと」(Meleis,1986)であると同時にトランジションの結果として変化が起こる(Meleis,2010)。発達障害のある子どもと家族は、就学期という移行の中でさまざまな変化を体験する。本研究においても支援の基盤に〔移行期のニーズを捉え病気体験を理解する〕ことがあった。子どもと家族の体験を捉えることは、信頼関係の構築にもつながり重要なケアの一つとして捉えることができる。また、Meleisら(1986)は、移行を支援する視点として、移行の特性を理解し、移行の促進要因、抑制要因を見極め、支援していくことの重要性を論じている。具体的には移行への気づきや移行過程への関与の程度、移行に伴う変化と相違への対応等を把握し、個人の状況(意味づけ、文化的信念と態度、社会的経済的状況、準備性と知識)や地域の状況(社会的資源、つながり)、社会の状況(スティグマ等)が移行与える影響を見極め支援していくことの必要性を示唆している。本研究においても、発達特性をどのように捉えているのかを子ども、両親、家族、地域の複眼的視点から捉え支援につなげていることが明らかになった。またその子が周りからも脅かされず、その子らしくいられるようにできることに注目し肯定的フィードバックしながら

ら自信を育み、移行のプロセスを辿っていけるように支援していた。また多くの支援者が実感できるような目に見えるかたちで支援をつなぎ、多職種との協働体制を築いていた。

移行支援においては、移行過程の中で新たな役割を修得する力を引き出すこと(Chick&Meleis;1986)が重要である。本研究においても、その子の強みを引き出し、強化しながら子どもが学校生活の中でその子にあった役割を果たしていくことができるよう支援していた。保護者に対しても状況の捉えの温度差を見極め、心に寄り添いながら両親それぞれに必要な役割があり、父親と母親がともに子育てにかかわることの大切さを伝えていくように支援していた。役割遂行、役割達成に注目して、支援を行っていく視点が発達障害のある子どもと家族の支援においては重要であることが示唆された。さらに、子ども - 家族 - 地域のダイナミズムの中で支援ニーズを捉え、個別や二者関係、家族全体への支援など重層な支援を継続的に行っていくことが支援の基盤ともなっており、現在 - 過去 - 未来の時間軸で支援を考えると同時に、縦と横のつながりをもつ支援のしくみづくりの重要性が見出された。また、とくに子どもや家族、さらには同胞の発達にも目を向け、家族の発達を支援することも必要である。

今後は、さらに対象を増やすと同時に、発達障害のある子どもと家族の就学期の移行を支える看護ケアの洗練化を行い、より実践での活用可能性のあるモデルの構築を図っていきたい。

Chick, N. & Meleis, A. I. (1986): Transition: A nursing concern. In P.L. Chinn (Ed.). Nursing Research Methodology. Boulder, CO: Aspen Publication. PP.237-257

厚生労働省：発達障害者支援法の改正について：https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000128829.pdf ,(検索日：2023.6.15)

厚生労働省・健やか親子 21 推進協議会：健やか親子 21 (第 2 次)

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000067539.pdf> ,(検索日：2023.6.15)

Meleis, A. I. (1986): 看護における理論検証 - 概念的・経験的・検証過程, 臨牀看護, 12(6), 837-846

Meleis, A. I. (1987): 役割理論と看護研究, 看護研究, 20(1), 53-81

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中野 綾美 (Nakano Ayami) (90172361)	高知県立大学・看護学部・教授 (26401)	
研究分担者	時長 美希 (Tokinaga Miki) (00163965)	兵庫大学・看護学部・教授 (34524)	
研究分担者	嶋岡 暢希 (Shimaoka Nobuki) (90305813)	高知県立大学・看護学部・准教授 (26401)	
研究分担者	高谷 恭子 (Takatani Kyoko) (40508587)	高知県立大学・看護学部・講師 (26401)	
研究分担者	川本 美香 (Kawamoto Mika) (10633703)	高知県立大学・看護学部・助教 (26401)	
研究分担者	畠中 雄平 (Hatakenaka Yuhei) (60649846)	琉球大学・法文学部・教授 (18001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------